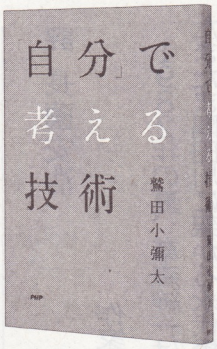
ほっかいどう

「自分」で考える技術　鷲田　小彌太著



評　谷口孝男
北海道立文学館副館長

学ぶ一歩を踏み出すために

本書が初めて世に出たのは1993年。それから20年余、再編集されて出版された息の長い著作だ。この間、高度情報社会に突入、コンピューターは爆発的に機能が向上し、ワープロは専用機からパソコン・アプリの一つとなった。電脳技術の豊饒（じょう）化にもかかわらず、著者の方法論は揺らがず、全く古びていないことに驚かされる。

ものの見方考え方（方法）を教える本はあふれている。一般的なのは人生の成功者による体験論で、これらはビジネス本、ハウツー本、自己啓発本として流布しており、すぐ役に立つ（気がする）。もうひとつは哲学・思索系。愛とは死とは人生とは何か―と問いかける。世界の哲学者の思想が下敷きに置かれているが難解で役に立たない（気がする）。

本書は軽装本の体裁を取っているので惑わされがちだが、その両極を超える充実の快著だ。本当は難しいのだがとても易しく、簡単なようでいて実に奥が深い。「現在」と向き合う哲学入門書でもある。

著者が強調しているのは特権階級の知から、知が普遍化し大衆化する状況の中で、主体性を持って新しい時代を生き抜こうということだ。そのためには「自分で考える」ことが必要であり、誰にでも開かれている「技術」を身につけようという。モラトリアム人間もそう悪くはないのだと知る。成熟した社会への著者の信頼は、晩年に「僕ならこう考える」と若者向き人生論で名人芸をみせた吉本隆明に通じるものがある。

例題がある。「国家」とは何かを小論文で書いてみよう。「都市・東京」論はどうか。思考を実践で鍛えるのだ。よりよく考えるためには書物の読み方や情報収集も大事だ、ということも教えてくれる。大胆に、謙虚に、学ぶ一歩を踏み出すために読む本。

（PHP研究所　1188円）

新刊情報

◆**倉本聰、林原博光著「愚者が訊（き）く」**＝富良野自然塾の塾長と副塾長が、環境、農業、原発など日本が直面する危機について、池上彰はじめ専門家7人に教えを請い発言に耳を傾ける。双葉社　1080円

◆**平山譲著「最後のスコアブック」**＝駒大苫小牧高野球部の香田元監督を描く「優勝旗のかわりに」など6編を収めるノンフィクション短編集。「野球からの贈りもの」を改題。PHP文芸文庫　810円

◆**小坂國男著「ベトナムぶらり旅」**＝札幌在住のイラストレーターによるベトナム紀行集。200枚を超えるイラストと文章で庶民の生活を描き出している。花伝社・発行、共栄書房・発売　1620円

◆**梅沢俊著「新版　北海道山の花図鑑―利尻島・礼文島」**＝人気図鑑シリーズをリニューアル。両島の植物366種類をカラー写真で紹介。北海道新聞社　2160円

◆**亀井秀雄著「小樽『はじめて』の文学史　明治・大正篇」**＝明治14年（1881年）に始まる小樽の文学動向を概説。著者は北大名誉教授、市立小樽文学館前館長。小樽文學舎☎0134・32・2388　非売品

絵・あべ弘士